

# ヘレナ

——ローマ帝国皇太后から泉の女神へ——

見市雅俊

## はじめに

この人がいなかったら、歴史の流れは全然、違っていただろうと思わせる、まことに「稀有」な人物のひとりがコンスタンティヌス大帝である (Veyne 3)。

ローマ帝国は多神教のまさに黄金時代であり、国際化と未曾有の経済と文化の繁栄を背景に、各国から渡来した諸宗派のまさに史上最大の、そして最後の「競演・饗宴」をみたのであった。そのなかで他とは異質の一神教であるキリスト教が競演に勝ち抜き、そうして「国教」の座を射止めることになるわけだが、その勝利にコンスタンティヌス大帝が重要な役割を果たしたことは誰も否定しないだろう。問題は、それをどの程度のものとするかである。

300年頃のローマ帝国におけるキリスト教徒の推定人口は、研究者によって違って来るけれども、だいたい全人口の5~10パーセントという範囲に収まっている。いずれにしても、驚異的な数字であることは間違いない。また信者の主力は都市部の中間層であったが、上流階層にも浸透しつつあり、数字以上にキリスト教の社会的な比重が重くなっていたことも確かである。

では、その「自力」の信者獲得路線がそのまま順調にいったとして、「自

然」にキリスト教＝国教の世界が誕生したであろうか。今日の宗教史研究において強調される、4世紀以降、キリスト教が遭遇する、いまや「異教」という侮蔑的なレッテルを貼られた、伝統的多神教という壁の厚さをみれば、不可能とまではいわないにしても、難事業になっていたことは間違いない（Fox *passim*）。だとすれば、4世紀におけるキリスト教世界の誕生は、ローマ帝国の皇帝という強力な「パトロン」がたまたま存在したがゆえの、ほとんど「奇蹟」に近い「事件」だったといってもけっして過言ではないはずである。

実際、同時代にあつて『教会史』と『コンスタンティヌスの生涯』を著してキリスト教世界の誕生を高らかに謳い上げたエウゼビオスの場合も、コンスタンティヌス大帝がキリスト教色を前面に打ち出す、その前夜までは現世でのキリスト教の勝利などまったく想像できず、ひたすら「終末」の到来とキリストの「再臨」を待ち望んでいたのである（Fox 608 ff.）。その意味でコンスタンティヌス大帝は、エウゼビオスをはじめ当時のキリスト教徒にとってはたしかに奇蹟的な存在だったのである。

そのコンスタンティヌス大帝にまつわる諸々の歴史事象のなかで、非常に解釈が難しいのが生母ヘレナである。キリスト教世界の誕生に深く関わる存在であり、伝承と表象の世界では第二の聖母マリア的な存在となる。ヘレナ崇拜はキリスト教世界全体に広まるが、とくにブリテン（イギリス）においては、コンスタンティヌス大帝の「旗揚げ」との関連で、ヘレナ＝ブリテン人説がまかり通ることにもなる。

以下、本文ではいくつかの先行研究を参照しながら、この非常に魅力的で、そして不思議な存在について研究ノータ的にまとめてみたい。また、キリスト教徒、コンスタンティヌス大帝誕生の、決定的とされる契機についても検討する。

## 一 日陰の身

ヘレナの出生から。確かなことはわからず、したがって状況証拠の積み重ねとならざるをえない。出生地の最有力候補は、小アジアの属州ビテュニア（Bithynia）のドレパナム（Drepanum）である。ヘレナの死後、328年、コンスタンティヌス大帝が亡き母にちなんで、ここをヘレナポリス（Helenopolis）と改名したからである。しかしながら、それ以外に理由があった可能性も排除できない（Harbus 12～3）。あとでみるように、ヘレナがある時期、そこで暮らしていたことを記念して、という可能性もあるからである。出生の時期についても諸説あるが、だいたい「250年か、その前後」で落ち着いている（Stephenson 2）。このように情報不足ということは、申すまでもなく、身分が「卑しかった」ということである。問題は、どの程度まで卑しかったかである。

395年、ミラノ司教、アンブロシウスは、崩御したテオドシウス帝を追悼する説教をおこなった。この説教は、ヘレナ論について二つの点でたいへん重要である。ひとつは、あとでみる「聖十字架」とヘレナのこと。そしてもうひとつが、コンスタンティヌス大帝の父であるコンスタンティウスとヘレナとの出会いである。

アンブロシウスは、コンスタンティウスと出会った時のヘレナのことを、“stabularia”と呼ぶ。「旅籠の若い女性（stable girl）」ということである（Barnes 2014 31～2）。もしヘレナがその使用人だったとすれば、性的な業務が強く連想されることになる。事実、反キリスト教の急先鋒として知られるギリシャ人の歴史家、ゾシムス（fl. 490s～510s）の『新しい歴史』は、コンスタンティヌス大帝のことを「身分の低い女性とコンスタンティウス帝との婚外交渉の息子」、もしくは「売春婦の息子」と呼んでいる（Drijvers 16）。

キリスト教側の論者も、ヘレナは非常に低い身分の出身であり、コンスタンティウスと正式には結婚していないというのが当時も、そして現在でも有力な説であって、たとえば、すぐれたヘレナ研究であるドリイフェルスの『皇太后ヘレナ』もこの定説を踏襲している (Drijvers 15~16)。

それにたいしてローマ史研究の泰斗ティモシー・バーズは緻密な史料分析から、つぎのような説を導き出している。すなわちヘレナは、属州ビテュニアの帝国公営の「宿駅 (mansio)」の管理人の娘だった、というのである。つまりヘレナの社会的地位は、通説でいわれるよりは「かなり高かった」、ということになる。そしてバーズはコンスタンティウスの経歴を丹念にたどったうえで、272年春、行軍中のコンスタンティウスがそこに投宿、そうして二人は出会い、正式に結婚し、273年2月には将来のコンスタンティヌス大帝が誕生した、としている (Barnes 2014 33 ff.)。さらにバーズは、もうひとつ正式婚説=コンスタンティヌス大帝・嫡子説の根拠を提示しているが、それについては後でみる。

コンスタンティウスは3世紀後半の群雄割拠の時代にあって、みるみる頭角をあらわしてゆく。その伴侶の破格の出世が、正式に結婚したのかそれとも内縁関係だったのか、いずれにせよ「糟糠の妻」だったであろうヘレナを「日陰」の身に追いやることになる。

293年、ディオクレティアヌス帝の主導のもとで帝国を四分割したうえで、それぞれに「正帝」ないし「副帝」を張り付ける「四帝分治制」がはじまった。その布陣は以下のとおりである。

東方	正帝	ディオクレティアヌス	小アジア、エジプト
	副帝	ガレリウス	バルカン半島
西方	正帝	マクシミアーヌス	イタリア半島、北アフリカ、イベリア半島
	副帝	コンスタンティウス	ガリア、ブリテン

マクシミアヌスとガレリウスはともにディオクレティアヌスの腹心であり、そしてコンスタンティウスはそのマクシミアヌスの有能な腹心だった。そしてこの時、ディオクレティアヌスとマクシミアヌスはそれぞれの娘を、有能ゆえに危険でもある部下に嫁がせたのであった（Leadbetter 77）。

ヘレナは、身を引く。四帝分治制は共和政時代の三頭政治と同じように、相互に疑心暗鬼のパワー・ゲームであり、そこで用いられた戦術のひとつが婚姻であり、ヘレナはその犠牲者だったわけである。古今東西、そのような政略結婚は数限りなくあり、そのなかで切り捨てられ、姿を消していった女性は無数にいたに相違ない。ところがヘレナの場合は、長い雌伏の時を経て再度、歴史の表舞台に登場するのである。「孝行息子」のおかげである。

## 二 孝行息子——その（一）

相互の疑心暗鬼状態のなかで、副帝となったコンスタンティウスと先「妻」ヘレナとの間に生まれたコンスタンティヌスは、ニコメディアの東方・正帝のディオクレティアヌスの宮廷におかれた。事実上の「人質」である。この時、ヘレナは、ニコメディアの近隣にあるドレパナムで暮らしていたのではないかと、そしてそれを記念してコンスタンティヌスはそこをヘレナポリスと改名したのだ、とバーンズはみる（Barnes 2014 38）。

303年、ディオクレティアヌス帝によるキリスト教の弾圧がはじまった。史上名高い「大迫害」だが、竜頭蛇尾に終わったとするのが今日の通説である。キリスト教徒が「多すぎ」て対処しきれなかったのである（Stephenson 108）。他ならぬディオクレティアヌスの妻と娘もキリスト教徒だったとする説さえある。

305年、第二次四帝分治制がはじまる。第一次のさいの二人の正帝が勇

退し、つぎのような布陣となった。

東方	正帝	ガレリウス	副帝	マクシミヌス・ダイア
西方	正帝	コンスタンティウス	副帝	セウエールス

マクシミヌス・ダイアはガレリウスの姉妹の子供であり、セウエールスもガレリウスの腹心であり、おそらく親類筋だった。

305年末、西方・正帝のコンスタンティウスの要求で、ニコメディアにいたコンスタンティヌスが父親のもとに帰還した。この帰還はコンスタンティヌス大帝をめぐる幾多の伝説のはじまりとなる（Stephenson 116）。

コンスタンティヌス大帝の崩御（337年）の後に書かれたエウゼビオスの『コンスタンティヌスの生涯』のなかでは、この合流はモーセの出エジプトになぞらえられている。すなわち、コンスタンティヌスを「嫉妬と恐怖心」でみていた東方・正帝のガレリウスらは「殺害」の「陰謀」をめぐらしたのだが、コンスタンティヌスはモーセに「似て」、「逃亡することで身の安全を図り」、そうして「遠隔の地であったにもかかわらず」、「父の命がまさに尽きようとしていたそのとき、到着した」とされる。スリリングな脱走劇であり、しかも父親の死に目にもあえた、ということである（エウゼビオス 36～37）。

実際には、すでにみたように双方の合意のもとでの帰還であり、そして、コンスタンティウスはその翌年の306年7月、遠征中のグレート・ブリテン島のヨークにおいて急死する。エウゼビオスのシナリオでは、死の床でこの西方・正帝は「自然の法により、ご子息たちのなかの最年長のコンスタンティヌス」を後継者に指名した、となる（エウゼビオス『生涯』38）。

この時、コンスタンティウスと「後妻」のテオドラとの間には三人の男の子が生まれていたが、その長男もまだ10歳かそこいらだった。とはいえ、これらの腹違いの弟たちの血筋は、「旅籠」ないし「宿駅」の世界の

ヘレナ（見市）

血を引くコンスタンティヌスよりもはるかに「高貴」であった。そこでバーンズが強調するのは、そのうえにコンスタンティヌスが「嫡子」でなかったなら、四帝分治制のパワー・ゲームに加わることはありえなかったはずだ、ということである（Barnes 2014 35）。

最後の決め手は、コンスタンティヌスの配下の軍隊が血筋では劣るはずのコンスタンティヌスを「選んだ」ことだった。ローマ皇帝と軍隊との関係を端的に示す事例でもある（Stephenson 116; Drake 37）。

ここで排除されて日陰に追いやられたコンスタンティヌスの三人の腹違いの弟のうち、おそらく夭折したひとりを除く二人とさらにその息子たちは330年代、コンスタンティヌス大帝の「王朝」の「お家騒動」の渦中に再登場する。その展開のなかで皇帝になったのが、かの「背教者」ユリアヌスである。

コンスタンティヌスからコンスタンティヌスへの権力の移譲にともない、以下のような第三次四帝分治制がはじまった。

東方	正帝	ガレリウス	副帝	マクシミアーヌス・ダイア
西方	正帝	セウエールス	副帝	コンスタンティヌス

306年10月、マクシミアース（第一次四帝分治制の西方・正帝であり、305年に東方・正帝のディオクレティアヌスとともに勇退していた）の息子であるマクセンティウスが帝都ローマにおいて旗揚げし、父親を「正帝」に据えた。四帝分治制にたいする重大な挑戦である。早速、西方・正帝のセウエールスがマクセンティウス討伐に乗り出すが、逆に捕虜になって殺されてしまう。その後の東方・正帝のガレリウスの討伐軍も敗退する。

ここでコンスタンティヌスの私生活をみておく。303年頃に長男のクリスプスが誕生する。母親の名前はミネルヴィナ。ここでも、クリスプスが

嫡子だったかどうかをめぐって二つの相容れない見方がある。一方では、正式の結婚ではなかったとする説（Guthrie 327; Leadbetter 79; Pohlsander 80）。他方では、正式の結婚による嫡子とする説（Potter 96 ff.）。バーンズは自身が認めるように「大胆で、あくまで憶測の説」として、ミネルヴィナはディオクレティアヌスの親類だったかもしれない、としている（Barnes 2014 49）。

いずれにしても、ミネルヴィナはおそらくクリスプスを出産した後、すぐに死去し、そうしてクリスプスはヘレナのもとに預けられたとする説もある（Stephenson 113）。なおヘレナは、コンスタンティヌスの西方への「脱出」にともない、コンスタンティヌスの支配の拠点となる「トリーア」に移り、それから、帝都ローマに住むようになったと推測されている（Barnes 42）。

307年夏、「寡夫」となっていたコンスタンティヌスは、反四帝分治制の皇帝のマクシミアヌスの娘で、この時まで14～15歳のファウスタと「再婚」する。セウエールスの敗北をうけての政略結婚だった（Stephenson 119 ff.）。

ここから事態は急展開をとげる。308年4月、マクセンティウスが父親のマクシミアヌスを追放し、自ら皇帝を名乗ることになった。実子に追われたマクシミアヌスは義理の息子であるコンスタンティヌスのもとに身を寄せた。同年11月、隠居の身だったディオクレティアヌスの仕切る会議が開かれ、第四次四帝分治制が編成された。

東方	正帝	ガレリウス	副帝	マクシミヌス・ダイア
西方	正帝	リキニウス	副帝	コンスタンティヌス

リキニウスはガレリウスの腹心であり、副帝から正帝というルールを破る人事であった。311年、ガレリウスが死去し、ここに四帝分治制は事実



上、幕を閉じ、残った第四次四帝分治制の三人の正帝・副帝と、帝都を握るマクセンティウスの四人のサバイバル・ゲームとなった。そのなかでコンスタンティヌスが最終的に勝ち残るわけだが、この最終的勝利への途とキリスト教徒・コンスタンティヌスの誕生にとって決定的な契機となったとされるのが、天上の奇蹟とマクセンティウスを打ち破った312年のミルヴィオ橋の戦いだった。章を改めてみることにしよう。

### 三 孝行息子——その（二）

天上の奇蹟についてもっとも重要な史料となるのは、エウセビオスの『コンスタンティヌスの生涯』の以下の文章である（エウセビオス42～51）。

帝都ローマでの「暴君」、マクセンティウスの圧政を知るにつけコンスタンティヌスはどうしたものか思い悩んだ。すると、「まったく意想不到的ある神的なしるしが現われたのです。」

その「しるし」については、「わたしがかたじけなくも接見と知遇の栄を得たとき、勝利者となられた皇帝がこの話を、直接わたしに語り、しかもその言葉の真实性を誓いで保証されたのです……。」すなわち、325年のニカイア公会議のさいにコンスタンティヌスから直々に聞いた、ということである。

先にも述べたように、『コンスタンティヌスの生涯』はコンスタンティヌスの死後に書かれる（エウセビオス自身は339年に死去）。そして多くの研究者が指摘しているように、エウセビオスの文章そのものが混乱しており、誤読される一因になっている。そのことを念頭に置きながら、エウセビオスが綴る、その時、コンスタンティヌスが話したとされるものの内容を再構成すると、つぎの三つに分かれる。

- ① コンスタンティヌス軍が白昼の行軍中に、天上のある現象を目撃

する。「真昼の太陽の頃で、一日がすでに午後になりはじめていた頃、コンスタンティヌスによれば、彼はまさしく己の目で、ほかならぬ天に、太陽の上に懸かる、その形状が光で示された十字架のトロパイオンを目にされたのです。それには『これにて勝利せよ』と書かれておりました。彼と兵全員がその光景を見て驚愕しました。兵士はそのとき、彼がある場所に率いて行く遠征に同道していて、その奇蹟を目にしたのです。」(エウセビオス 46)

- ② この「幻が現れた時のことですが、コンスタンティヌスは、この尋常でない幻に仰天し……ご自分の問いかけに答えてくれる者を召集されました。……彼らは、その神は一にして唯一の神の、唯一生まれた子であり、皇帝に現れたしるしは不死の象徴であり、かつて地上に來られたときに獲得した死に打ち勝った勝利のトロパイオンだった、と述べました。……彼は今や、神の靈感を受けた文書に触れてみようと考えられました。神の祭司たちをご自分の顧問官に任命(した)。……そして以後、ご自分のうちに生じたよき希望に守られると、彼はついに暴君の威嚇的な炎を消すことに勇躍乗り出されたのです。」(エウセビオス 50~51)
- ③ コンスタンティヌスは①の「幻」の意味がわからずに当惑した。「そして睡眠中の彼に、神のキリストが、天空に現れたしるしと一緒に現われ、彼に天空に現われたしるしの写しをつくり、これを敵の攻撃から身を守る護符として使用するよう勧められたのです。」翌朝、コンスタンティヌスは職人たちに説明し、それをつくらせる。「それは次のような形状につくられておりました。金箔で覆われた長い縦棒に横棒が取り付けられ、十字架上になっておりました。縦棒の突端には宝石や金が詰め込まれた花冠がしっかり取り付けられておりました。そこには救い主の呼称の象徴が、最初の文字を介してキリストの名を暗示する二つの要素で

示されておりました。ロー（P）がちょうど真ん中でキー（X）と交差していたからです。」すなわち、「十字架のトラパイオン」の誕生であった。（エウセビオス 46～49）

まず、エウセビオスのもとの文章では、天上の幻の目撃（①）→夢のなかのキリストとトラパイオン（軍旗）の制作（③）→キリスト教徒を顧問官に（②）→暴君討伐に出撃、という順番になっていて、天上の奇蹟を目撃し、ただちに十字架を象徴する軍旗をつくり、それを掲げてマクセンティウスにたいする「聖戦」に突入した、との印象をあたえてしまう。しかしながら、「十字架のトラパイオン」が登場するのは、実際にはもっと後の、コンスタンティヌス＝キリスト教徒の様相が歴然としてきた段階のことなのである（Barnes 2014 77～78）。

つぎに、①の「天空に現われたしるし」の解釈をめぐって、大きな一石を投じたのがドイツの学者、ペーター・ヴァイスの論文である。もともとは1993年にドイツで出版されたある論文集に寄稿されたものだが、ドイツの学界では黙殺された。ところが2003年に英訳されて、『ローマ考古学雑誌』に掲載されると、大きな反響を呼んだのであった（Weiss; Flower）。ヴァイスは、エウセビオスをはじめとするさまざまな史料の緻密な分析と気象学的な分析の両面から、コンスタンティヌスがみた「神的なしるし」とは「暈（Halo）」現象だったと結論したのである。前世紀末でも人文系の「アカデミシャン」を自負する人びとの間では、「人文」の世界に「自然科学」を持ちこむことにたいするアレルギーがなお強かった。バーンズによれば、21世紀になって風向きは変わりつつある、という（Barnes 2014 75）。

ヴァイスによれば、そもそも皇帝たるものがこのように「神的なしるし」を、それも白昼、臣下とともに「集団」で目撃し、さらにそれがその後の行動まで左右した、と語る事それ自体が「前代未聞」のことだった

(Weiss 238)。③の「個人」的な神秘体験（本当にコンスタンティヌスがそのような夢をみたかどうかは別問題として）とは、たしかに位相を異にしているのだ（Barnes 2014 77）。

この暈現象をみた時期と場所について。310年の冬から春にかけてコンスタンティヌスはライン河口にいたフランク族を討伐するために遠征するのだが、その不在中に、保護してあげたはずの義父のマクシミアヌスがクーデターをおこす。コンスタンティヌスは急いで戻り、マッシリア（マルセイユ）においてこれを鎮圧し（マクシミアヌスはおそらく自害する）、再びガリアの地を北上するのだが、おそらくその途中で暈現象を目撃した、とヴァイスはみる（Weiss 250）。その根拠となるのが、対マクシミアヌス戦の勝利を称える、アウグストドゥヌム（Augustodunum ——現在のオータン）の、名前は不明の雄弁家の手になる頌辞のなかの以下のくだりである。

コンスタンティヌス様、貴下はご覧になったのです、アポロとそれに連れ添うヴィクトリーアが、貴下に月桂樹の冠をそれぞれ差し出すのを。そのヴィクトリーアは、陛下に勝利の王冠を授けました。そのひとつひとつが、30年（の支配）を予言するものであります。……陛下は、まさしく神をご覧になったのです。その神の肖像のなかにご自身を確認なさったのであります。それは、詩人の聖歌によれば、全世界を支配すべきお方に他なりません。

これと、先にみたエウセビオスが記すコンスタンティヌスの目撃談とを同一のものとするのが、ヴァイスのもっとも重要な論点である（Weiss 249; Barnes 2014 78）。この点をはじめ全体として非常に説得的であり、「暈」現象、それもめったに見られないような劇的な現象を行軍中のコンスタンティヌス軍が目撃した、と理解してよいとおもわれる。

『コンスタンティヌスの生涯』とならぶ史料として、もうひとつ、同じキリスト教徒であるラクタンティウスの『迫害者の末路について』がある。313～315年に書かれたと推測されるが、そこでは、コンスタンティヌスはミルヴィオ橋の戦いの前夜、「夢のなかで天のしるし」をみて、そのしるしを兵士の盾につけ、そうしてマクセンティウスとの戦いに臨んだ、とある（Lactantius book 44）。この点についてはヴァイスもバーンズも、もとのテキストの再解釈をおこなっていて、両者とも夜間の「夢」という解釈を否定して、エウセビオスの①と同じものだ、としている（Weiss 246; Barnes 2014 79～80）。

このように、天上の奇蹟があつてすぐにキリスト教に改宗したわけではなく、当座はごく素直に、アウグストドゥヌムの雄弁家の頌辞にあるように、コンスタンティヌスはアポロ、もしくは太陽神のお告げである、と理解したとみられる。この310年から、コンスタンティヌス側が発行する貨幣に突然、「無敵太陽神（Sol Invictus）」が登場することがその証拠のひとつとして挙げられる。そして、このアポロ・太陽神・無敵太陽神への傾斜は、黄金時代としての五賢帝時代が終わって以降の歴史を概観すれば、量現象を目撃したかどうかは別にして、ごく「自然」なものとして理解することができる（Stephenson chap. 5）。

まず、シリア・エメサの太陽神神殿の神官の血を引く二人の皇帝が輩出される。エラガバルス帝（在位：218～222年）とセウエールス・アレクサンデル帝（在位：222～235年）である。とくに前者は太陽神信仰を奨励したことで知られる。ついで、ガリアの独立帝国とパルミラ帝国の両方を打ち破り、「世界の修復者」と称せられたアウレリアーヌス帝（在位：270～275年）は、それまで散発的にみられた無敵太陽神崇拝を国家行事に引き上げた。274年には無敵太陽神の神殿が完成した。さらにユリウス暦の冬至にあたる12月25日を「無敵太陽神生誕記念日（Dies Invicti Natalis）」とした。また4年に一度、無敵太陽神記念競技会を開催するこ

とにした。

ドレイクによれば、ここでみるべきは、皇帝権力の強化のための「シニカルな人心操作」ではなく、「新しい宗教性のムード (a new mood of religiosity)」なのである (Drake 129)。そしてキリスト教にひきつけてみれば、「普通」の人びとが棲まう「信仰の現場」においては、太陽神とイエスが重なり合い、「異教」と「キリスト教」とが「語彙と表象」を共有することにもなった (Drake 206)。「クリスマス」もその一環だったことはいうまでもない。

コンスタンティヌスも、まずは太陽神の流れに棹をさしたのである。そのうえでコンスタンティヌスは、上記の②によれば、キリスト教徒によって「真実」を知らされることになるわけだが、ここで重要なのは、彼の周囲にすでにキリスト教徒がいたということである。いいかえると、それ以前からコンスタンティヌスはキリスト教にたいして「シンパシー」を感じていた、ということに他ならない (Fox 612)。「聞く耳」を予めもっていた、ということである。以上を整理すれば、つぎのようになる。

- ① 310年、コンスタンティヌス軍が劇的な暈現象を目撃する。
- ② 周辺にいたキリスト教徒がこれはキリスト教の神のお告げであると申し立て、それ以前からキリスト教にたいしてシンパシーをもっていたコンスタンティヌスはしだいにその説に傾くようになるが、太陽神を捨てることはなかった。
- ③ これからみるように、ミルヴィオ橋の劇的な勝利によってコンスタンティヌスは、キリスト教にさらに傾斜する。
- ④ その後、キリストが夢のなかに現れたかどうかはともかく、聖なる軍旗、「十字架のトラパцион」をつくらせ、戦いに臨むようになる。

312年、コンスタンティヌスはガリアからイタリアに攻め入り、ミルヴィオ橋の戦いにおいて、マクセンティウスを破り、帝都ローマを掌握し、サバイバル・ゲームで決定的に優位に立つことになる。

興味深いのは、コンスタンティヌスの強引な戦略である。コンスタンティヌスは慎重論を押し切り、遠征隊を編成してイタリアに突入し、帝都ローマに侵攻したのだが、その兵力は4万人。迎え撃つマクセンティウス陣営は12万人を擁していた。すでにみたように、マクセンティウスは306年、二度も討伐軍を破っていた。その時の作戦はローマに籠城したうえで、買収もふくめて遠征軍を切り崩し、最終的に勝利したのであった。ミルヴィオ橋の戦いの最大の謎は、マクセンティウス側がそのような籠城作戦をやめて打って出たことである。まず、ラクタンティウスの記述をみよう（Lactantius book 44）。

こうして、コンスタンティヌスとマクセンティウスとの間で内戦がはじまった。マクセンティウスは、ローマ市内に立てこもった。占い師が、打って出れば、死ぬことになると言ったからだ。……武力の点では、マクセンティウスの方がはるかに優勢だった。マクセンティウス軍の兵士は優勢に戦った。それでもコンスタンティヌスは不屈の精神であらゆる難関に立ち向かい、ついにローマ近郊にまで兵を進め、ミルヴィオ橋の向かい側で露営した。……（ここで、コンスタンティヌスはあの夢をみた、という文章が続く）……その間に、ローマ市内では騒ぎがおきていた。マクセンティウスが国家の安全をまったく顧みないと罵られたのだ。その治世の記念日にサーカシア人のゲームを催したときであった。観客は声をひとつにして、『コンスタンティヌスはけっして負けない』と叫んだのである。気分を害したマクセンティウスは会場を去り、何人かの元老院議員を招集し、予言書を調べるように命じた。そのなかにつぎのような予言が見つかった。『マク

センチウスの即位記念日に、ローマ人の敵が減びるであろう。』この勝利の約束に導かれて、マクセンチウスは戦場に赴いた。橋は、マクセンチウスが渡った後、壊された。これがあって、戦いはいっそう激烈になった。神の御手が勝利した。マクセンチウス軍は総崩れになった。マクセンチウスは壊された橋に向かって逃げた。しかし、兵士の群に押されて、ティベル川に真っ逆さまに落ちたのであった。

つぎに、エウセビオスの『教会史』。「初版」は300年以前に書き上げられていたが、その後、書き足しがなされ、最終版はニカイア公会議の直後に完成する。以下に引用する第10巻は315年頃に完成した（エウセビウス 下 232～234）。

マクセンチウスは臣下の善意よりもいかさま師たちの奸計の方を信じて、あえて町の城門の外にも出ようとはせず、数え切れぬほど多数の武装兵や軍団兵の無数の群によって、自分が隷属させていたローマ近郊とイタリア全土のあらゆる場所や、地方、都市などを守った。皇帝は……ついにローマに迫るところまで来た。だが、そのときの神ご自身は、この暴君のために皇帝がローマ人との戦いをしいられることがないように、まるで鎖によるかのように、この暴君を城門から遠く離れた所に引っ張り出されたのである。

ここでエウセビオスは、「出エジプト記」の、エジプト脱出に成功した「モーセとイスラエルの民」が主を賛美してうたった歌から、ファラオの軍勢は紅海に呑み込まれた、とする箇所を引用する。そして、こう続く。

それと同じように、マクセンチウスや、武装兵、衛兵なども「深い



底に石のように沈んだ」（出エジプト記、15-5）そのとき彼は、コンスタンティヌスとともにあった神が送られた力を前にして逃げ出し、彼自身が小舟を連ねて巧みに橋をつくり……行く手の河を渡ろうとした。……こうして河にかけられた橋は壊れて渡れず、それらの小舟は兵士もろとも一瞬にして河底に消えた。まず不信仰の権化……自身が、次にはその盾持ちどもが、聖なる宣託の予告どおり、水かさの増した河に、「鉛のように沈んで行った」（出エジプト記 15-10）のである。

このように、当初、マクセンティウスはすでに二度も成功している籠城作戦をとったのである。ところが一転して打って出て、逆に返り討ちにあい、退却したものの、出撃のさいに橋を壊していったために、急ごしらえの橋しか利用できず、水死したのであった。

スティーブンソンは、マクセンティウスはその支配体制維持のために帝都市民にかつてないほどの重税を課したために不満が高まっていたとするが（Stephenson 137 ff.）、それが出撃以外に「途はなかった」ほど深刻なものだったかどうかは疑問である。むしろ、コンスタンティヌス軍を見くびり、前のめりで（「鎖によるかのように」）出撃したとみるべきではなからうか。いずれにしても、これをモーセの出エジプトになぞらえるエウセビオスは、コンスタンティヌスを心底、「奇蹟」の存在とみだし、そうみても当然の、危うい勝利だったのである。

そしてこの時、コンスタンティヌスは内心、キリスト教の神に「賭け」ていたのではないかと想像する。無謀ともおもえる強硬策。そうして劇的な勝利。エウセビオスやラクタンティウスは、キリスト教に改宗したがゆえに神のご加護で勝利したとみたが、逆であって、勝利したがゆえに「改宗」したのだ、とおもわれる。ただし改宗といっても、キリスト教徒か否かというまさに一神教「的」なそれではなく、（おそらく最期まで）

多神教「的」な色合いの濃いキリスト教徒だった、ということ強調しておきたい (cf. Gotoh)。

残された皇帝は三人。コンスタンティヌスとリキニウスとマクシミヌス・ダイアである。このうち、コンスタンティヌスは腹違いの妹のひとり をリキニウスに嫁がせていた。そして 313 年、リキニウスはマクシミヌス・ダイア軍を破った。

315 年、いよいよコンスタンティヌスの「王朝」づくりがはじまる (Van Dam 2009 126)。すなわち、クリスプス (おそらく 13 歳) と、コンスタンティヌスのもうひとりの腹違いの妹の亭主であるバッシアヌスを「副帝」に任命したのである。しかるに、316 年 8 月、「後妻」のファウスタが第一子、コンスタンティヌス二世を出産した。その直後にバッシアヌスは反乱計画のかどで処刑される。王朝づくりと裏腹の関係にある「身内殺し」のはじまりである (Van Dam 2009 174)。その後、ファウスタはさらに二人の男の子を産む。

316～317 年、残った二人の皇帝、リキニウスとコンスタンティヌスとが激突するが、この時は和平が結ばれ、クリスプス、コンスタンティヌス二世、それとリキニウスの子供が副帝に任命された。そして 324 年、コンスタンティヌスとリキニウスとの最終決戦があつて、コンスタンティヌスが勝利する。リキニウスはいったんは許されたものの、326 年、殺害される。

325 年、コンスタンティヌスの主導のもと、ニカイア公会議が開かれるが、エウセビオスによれば、その直後にエルサレムにおいて「救い主が復活された……場所」に教会を建てるように命じた (エウセビオス『生涯』194)。その経緯をエウセビオスはつぎのように書いている。

「不信仰な者」はこの聖なる場所がわからなくなるようにと、「アフロディテのダイモーン」を奉る「薄暗い聖所」を建立していた。皇帝はその撤去を命じた。そうして、イエスがいったん葬られた「聖墳墓」が発見さ

れる。

地の深い所が断層ごとに明らかにされていくについに、誰も予想しなかった、救い主の復活の巖かで聖そのものである証しが明らかにされたのです。そしてもっとも聖なるものである洞穴は、救い主の命の再生に似たような様相を呈しておりました。いったん闇の中に沈んだ後、次にそれは光の下に現われ、そして、見物にやって来る者に、この場所でなされた奇蹟の物語を目の当たりにすることを許し、他のどんな声よりも、雄弁に諸事実でもって救い主の復活を証したのです（エウセビオス『生涯』197～198）。

335年に落成する「聖墳墓教会」の「縁起」である（Stephenson 245, 252 ff.）

こうして324～325年、コンスタンティヌスはまさにその生涯の絶頂期にあった。ローマ帝国は再統一され、自身が主導したキリスト教会の公会議では「三位一体」の基本路線が敷かれ、そのために教義面においてもコンスタンティヌスはまさにキリスト教世界誕生の最大の立役者となる。「聖地」づくりもはじまった。

王朝づくりも軌道に乗ったかにみえた。コンスタンティヌスの長男、クリスプスは321年、ヘレナという名前の女性と結婚し、男子が誕生した。コンスタンティヌスにとっては初孫だった（Stephenson 219）。そしてクリスプスは祖父と父の血をよく受け継ぎ、有能な指揮官としての能力をいかに発揮するようになっていた。（Pohlsander 1984 *passim*; Stephenson 219～220）。エウセビオスの『教会史』も、324年の対リキニウス戦においてコンスタンティヌスとクリスプスが共同して戦ったことを強調し、そうしてローマ帝国がこの二人の力によって再統一されたことの喜びをつぎのように書いていた（エウセビオス 下 306）。

そこで、善人たちの守護者は……あのもっとも人道的な副帝であるクリスプスをしたがえて出陣し、滅びに瀕しているすべての者たちに救いの右手を差し伸べた。父と子の二人は……神を憎む者たちをあらゆる方面から取り囲んで攻め、難なく勝利を収めた。……この最後の勝者、コンスタンティヌスは、神にもっとも愛されたカエサル（副帝）で、すべての点で父に似た息子のクリスプスとともに、彼らのものである東方を取り戻し、往時のようにローマ帝国を一つに統一し、彼らの治下で平和を……四周に及ぼした。

そして副帝体制は、筆頭格のクリスプス、ついでコンスタンティヌスとファウスタの長男のコンスタンティヌス二世、そして次男のコンスタンティウス二世という布陣になった。コンスタンティヌス一族の帝位独占体制の完成である。つぎに、ヘレナはファウスタと同時に「皇太后・皇后 (Augusta)」の称号を授与された (Drijvers 41 ff.; Barnes 2014 43)。293年の離別から数えておよそ30年ぶりの復活劇であり、まさしく「孝行息子」だった。

#### 四 馬鹿息子

それから12年後の336年、コンスタンティヌスの死ぬ1年前にあたるが、「治世の三十年祭」が執り行われた。エウセビオスは、『コンスタンティヌスの生涯』にこう書く (エウセビオス 293~294)。

皇帝の三人のご息子——彼らは燦然と輝く副帝でした——は、異なる時期に、帝国の共同統治者に任命されておりました。父上と同じ名前のコンスタンティヌスは父上の十年祭のときにその名誉に与る最初の者となり、祖父と同じ名前でも飾られた二番目のコンスタンティウスは

二十年祭の頃に、そして、与えられたその名前が「意志強固」や「安定」を意味する三番目のコンスタンスは、第三の十年期祭の頃にその名誉に与ったのです。皇帝はこうして三位一体のロゴスのように神に愛された三人の子孫を得……

三人の息子と三位一体。クリスプスはどうしたのか。326年の前半、クリスプスは、父親直々の裁きにより処刑されていたのである。それだけではなかった。その数ヶ月後、こんどはファウスタが公の場から永久に姿を消してしまう。コンスタンティヌスは、長男と妻が立て続けになくなったのである。両方の事件は連関しているのではないか。当時からさまざまな憶測がなされてきた。

エウセビオスは「歴史家」として、かつては同志の殉教のドラマを記録しつつ自身はうまく受難せずにすんだ（当局と取引したという噂もあった）。そして大帝の妻と長男がほぼ同時にいなくなるという大事件も、完全に「スルー」する（現代のある種の歴史家の先駆者ではあるまいか！）。二つの事件を結びつけた最初の文字史料は、395年、テオドシウス帝が死んだ直後に書かれた『皇帝概略伝（*Epitome de Caesaribus*）』のなかのつぎの一文である（Woods 70～71）。

コンスタンティヌスは戦争でじつに見事に勝利してローマ帝国全体の支配権を掌握したのだが、妻のファウスタの差し金だといわれているが、息子のクリスプスを処刑するように命じたのであった。その後で、母親のヘレナが孫のことをひどく悲しみ、息子を叱責したので、こんどは妻のファウスタを沸騰する浴槽に投げこんだのであった。

同じような当時の史料がウッズによって紹介されており、二つの事件が当時から結びつけられていたことがうかがえる。その極めつけが、先にも

登場した、反キリスト教の歴史家、ゾジムスである (Woods 71)。

いまや帝国全体を手中におさめたコンスタンティヌスは、邪悪な本性をもはや包み隠すことがなくなり、好き放題のことをするようになった。……息子であるクリスプスは副帝の地位を授けられていたが、義母にあたるファウスタを誘惑したとの疑いで、コンスタンティヌスは……彼を死に追いやった。コンスタンティヌスの母親であるヘレナはこの非道な行為を深く悲しみ、この若者の死をひどく恨み、嘆き悲しんだのであった。そこでコンスタンティヌスは母親を慰めるという口実で、病気よりもっとたちの悪い方法をとったのである。すなわち、熱湯の風呂を用意させ、ファウスタをそのなかに閉じ込めたのであった。彼女はすぐに死んだ。

ゾジムスの劇的物語はまだ続く。むしろ、以下のことが彼にとってはもっと重要だったのかもしれない。こうである。さすがのコンスタンティヌスも「良心の呵責に苛まれ」た。そこにスペインからやって来た「エジプト人」がコンスタンティヌスにたいし、「キリスト教の教えなら、すべての罪を洗い流す方法を教えてくれる」と告げたのであった。こうしてコンスタンティヌスはキリスト教に改宗したのだ、となる。(Zosimus 2-29)

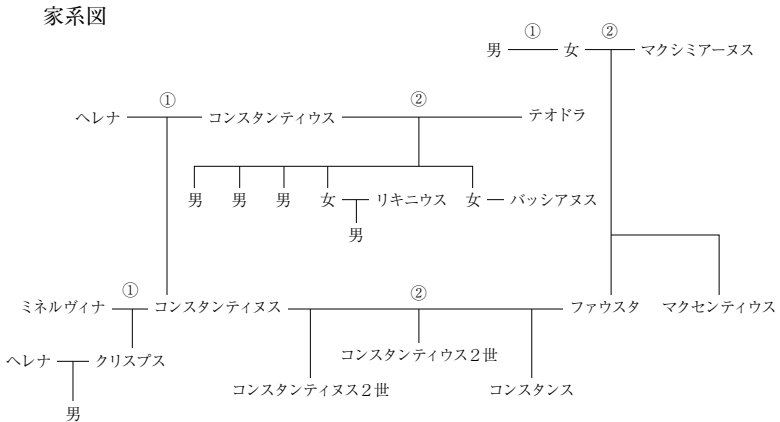
ファウスタがクリスプスに横恋慕し、振られた腹いせに、クリスプスによって手込めにされそうになったとコンスタンティヌスに吹き込んだとする史料もある (Woods 72)。そしてウッズの場合は、古代にあっては墮胎の方法として熱湯に入ることがあったことから、クリスプスと密通したファウスタが妊娠し、そこで墮胎しようとして失敗し絶命した、というかなり強引な説を立てている (Woods 76 ff.)。

ドリイフェルスの『皇太后ヘレナ』は博士論文をもとにしているためであろう、この件にかんしてもいたって「禁欲」的である (Drijvers 62)。し

かし、火のないところに煙は立たない。クリスプスの処刑にファウスタがからんでいた可能性は十分にあるとおもう。ここでコンスタンティヌス大帝の「家系図」をみてみよう。すると、コンスタンティウス帝とコンスタンティヌス大帝の驚くほどよく似た婚姻歴に気がつくだろう。まとめてみよう。

- 一 二人とも、「初婚」の相手は、身分が、少なくとも「それほど高くない」。
- 二 二人とも、その「初婚」で、有能な男子を授かる。
- 三 二人とも、離別（コンスタンティウス帝）・死別（コンスタンティヌス大帝）の後、政略結婚する。
- 四 二人とも、その「再婚」で、三人の男子を授かる

そしてみたように、コンスタンティウス帝の急死にさいして、コンスタンティヌスは三人（ないし二人の）腹違いの弟を日陰に追いやるかたちで皇帝になったのである。



ここでファウスタの身になって考えてみよう。父親似のクリスプスはすでに輝かしい戦歴を誇っている。すでに男子（コンスタンティヌス大帝の初孫）もいる。一方、ファウスタの長男のコンスタンティヌス二世は、みたように316年生まれ。ここでコンスタンティヌスに万が一のことがあったら、一体、どうなるだろう。当然、クリスプスが皇帝になるはずだ。その場合、彼女の三人の息子たちは殺されはしなくても、あのコンスタンティヌスの三人（ないし二人）の腹違いの弟と同じ運命にあうに違いない……。そこでファウスタは、コンスタンティヌスにたいして、たとえば、クリスプスが父親駆逐の陰謀をめぐらしていると讒言する……。そうしたシナリオが考えられないだろうか。現にファウスタの兄であるマクセンティウスが、二人の父親、マクシミアーヌスを追放したことはすでにみた。そのマクシミアーヌスも、みたようにコンスタンティヌスに反旗を翻したわけだが。

その場合、コンスタンティヌスがそれに耳を傾けたという点も同じくらいに（あるいは、それ以上に）重要になる。つまり、大帝はこの出来すぎた息子にたいして心ひそかに怖れを抱いていたのではなからうか。自分にそっくりの息子ゆえに怖れを抱かざるをえない悲劇ではなかったか。

そしてヘレナがこの「馬鹿息子」に激怒したのも、家系図をみれば領けよう。クリスプスは、まさに第二の大帝だったのだ。しかも、その母親は内縁だった可能性がある。さらに、すでにみたようにヘレナは、死んだ母親に代わって幼子クリスプスを育てた可能性がある。そもそもファウスタは、自分を日陰の身に追いやったマクシミアーヌス一族の出身だった。

こうして熱湯風呂かどうかはいざ知らず、またコンスタンティヌスがどこまで納得したのかはともかく、またヘレナが実際、どこまで「主導」したのはたぶん永久にわからないだろうが、その意向に沿ってファウスタがなんらかのかたちで死に追いやられた可能性は否定できない、とおもふ。もしそうだったとするならば、劇的復活からわずか3年目におきた、



あまりにも酷な役割だった。そのヘレナには、キリスト教世界に大きな足跡を遺すことになる「重労働」が控えていた。

## 五 第二の聖母マリア——（一）

326年のこの大きな悲劇の直後に、ヘレナの聖地巡礼が執り行われたのである。この時、ヘレナは250年生まれとして、75歳を超えていた。今風にいえば「後期高齢者」である。エウセビオスはコンスタンティヌス一家を見舞った悲劇にはいっさい触れない代わりに、『コンスタンティヌスの生涯』では、この巡礼について力をこめて書く。

- ① 「皇族らしく豪勢に、東方全域を巡察しておられたときのことで。彼女は、訪れた町の市民団に無数の贈物をし、……軍団の兵士に、無数のものを気前よく分配されました。彼女は着るものも寄る辺もない貧しい者にも沢山のものを与え、……ある者を獄から解放し、また劣悪な環境のもとで酷使されている者を解放し……たのです。……神への献身も蔑ろにされなかったのです。彼女は神の教会に出入りするご自分の姿をつねに人びとの目にさらされました。そして彼女は祈りの家を燦然と輝く財宝で飾り（ました。）……この素晴らしい女性は地味で質素な身なりで信徒の群れに加わり、神への畏敬の念を神が愛されることをすべて行うことで示されたのです。」（エウセビオス 212～213）
- ② エルサレムにおいて、「彼女は即、ご自分が崇敬する神に二つの聖堂を奉献なされました。一つはそのお方が誕生した洞穴の近くに、他の一つは〔そのお方がそこから天に〕取り上げられた山の上にあります。」（エウセビオス 210）
- ③ 皇后は「神の子の母の受胎を素晴らしい記念碑で飾り、この聖な

る洞穴をあらゆる仕方で美しいものにされたのです。」その後、皇帝がさらに「献納物」をくわえる（エウセビオス 210）

- ④ 「皇帝の母堂はまた、オリブ山の上に、全世界の救い主の天への旅立ちを記念して壮大な建造物を建てられました。」（エウセビオス 210～211）
- ⑤ 「皇帝はこれら二つのものも美しくして敬意を払われ、そして人類の生にかくも大きなよき働きをして仕えられたご自分の母堂へレナの記憶を永遠のものにされたのです。」（エウセビオス 208）

③はベツレヘムの「降誕教会（Church of the Nativity）」、④はエルサレムの「昇天教会（Chapel of the Ascension, Jerusalem）」である。

このヘレナの巡礼の目的についてひとつの有力な説は、それがクリスプス・ファウスタの「醜聞」の文字通り直後に決行されたことから、今日風にいえば対「世論」慰撫作戦だったとする見方である（Barnes 1981 221）。勿論、真相がわからないかぎり、なんともいえないわけだが、少なくとも、後期高齢者がこのような一大行事を決行したということは、よほど切羽詰まった事情があったに違いない、とみるのが自然であろう。また巡礼の歴史からみても、すでにキリスト教徒の聖地巡礼がおこなわれるようになっていたとはいえ、このように詳細が記録された、大がかりで「公」的な巡礼はこれがその最初の事例だった（Holum 70, 76）。さらに、聖地エルサレムの整備そのものを主導したのはヘレナであり、大帝はそれに追随したのだとする見方もある（Lenski 115）。

後期高齢者にとってこの巡礼は厳しかったようで、それから程なくしてヘレナは死去する。死亡した年はおそらく 327 か 328 年末、そして死んだ場所の候補としてはトリーアが挙げられている（Drijvers 73 ; Harbus 18）。

ここで、ヘレナとキリスト教との関係を見ることにしよう。エウセビオスは以下のように、コンスタンティヌスがヘレナをキリスト教に改宗させ

たとする。「彼は彼女を神を畏れる者とされたので——それまでの彼女はそうではなかったのです。」（エウセビオス『生涯』215）ここでも、ドリイフェルスは手堅くこの説を引き継ぐ（Drijvers 35）。それにたいしてステイーブソンは、3世紀におけるキリスト教会の急成長の鍵を女性キリスト教徒の存在にみるスタークの研究を踏まえつつ（Stark; Stephenson 5, 38~41）、ヘレナはコンスタンティウスと「結婚」する前からキリスト教徒だったとし、さらに夫と子供を「感化」したとして、つぎのようにいう（Stephenson 3）。

ヘレナの亭主でコンスタンティウスの父親はキリスト教徒ではなかったが、正帝からの訓令があったにもかかわらず、キリスト教徒にたいして寛大であった。……コンスタンティウスはそれ以上に寛大であり、改宗する前からキリスト教徒の利益になるように行動していた。二人の行動は、キリスト教徒女性の夫と息子からまさに予想されるものだった。

コンスタンティウスの決定的な局面においてキリスト教徒が深く関わっていたことは、すでにみた。そしてニカイア公会議をふくむコンスタンティウスとキリスト教との関わりのありようは、コンスタンティウスがキリスト教徒にごく「自然」に接していたであろうことを強くうかがわせている、とおもう。長じてからの、そして政治的思惑からの、「付け焼刃」的な改宗ではありえない。だとすれば、その自然的な接し方は、何よりもまず、ヘレナの存在に由来するとみてもよいのではなからうか。

そして、コンスタンティウス自身は自分を第二のキリストと見立てる場面があったとエウセビオスが記録していることもよく知られている。さらに、エウセビオスは聖地における教会づくりをあたかも二人の対等の共同作業であるかのような書き方をしていた。ヘレナはまさに第二の聖母マリ

アに擬せられているのである。

## 六 第二の聖母マリア——その（二）

今日では、ヘレナの名前はコンスタンティヌス大帝の母というよりも、「聖十字架（The True Cross）」の発見者として知られている。そして聖十字架は、聖遺物のなかでもとくに人気が高く、現在、各地に散在する聖十字架の「木片」と銘打ったものを全部つなぎ合わせると、何十本もの十字架になるという半ば冗談、半ばたぶん本当の話もある。とはいえ、最初の300年間、キリスト教徒の世界において十字架はさして重要な信仰上のアイテムではなかった。それが4世紀以降、しだいに重要視されるようになってゆくのだが、「聖十字架」の「発見」は、この「十字架崇敬」の流れを加速度化したのであった（Drijvers 81; MacCulloch 195）。

その聖十字架をめぐる、ひとつ論争がある。聖墳墓の発見を契機とする教会建設のことはすでにみた。それに関して、この時、発見されたのは、じつは聖墳墓ではなく、聖十字架だったとする説がある。だいたい慎重第一のはずのドリイフェルスもその説を唱えるひとりで、この壮大な教会の建設の「理由」は、「エウセビオスがわれわれにそう思わせたがっている聖墳墓の発見ではなく、じつは聖十字架の発見」だったのだ、としている（Drijvers 85～86, 89, 93, 183）。ならば、なぜエウセビオスは黙っていたのかという点については、ドレイクの神学的な説明がある（Drake 377～378）。しかしながら、エウセビオスの「沈黙」は単純に、そのような事実はなかったからだとするポールサンダーの議論にわたしは与する（Pohlsander 1995 101 ff.）。

4世紀半ば頃から聖十字架のことが口の端に上るようになり、聖十字架の木片と称するものが装身具等のかたちで流布するようになる（Drijvers 90 ff.; Pohlsander 1995 103～104; Barnes 44）。ヘレナに続く女性巡礼者と

して知られるエゲリアは381～384年、中東を巡礼した。そのさい故国（おそらくスペイン）の「シスター」宛に書かれた手紙には、「殉教廟（Martyrium）」、別名、「大教会」（聖墳墓教会のこと）における三時間にもおよぶ聖十字架の御開帳の儀式に参列したことが綴られていた（Egeria 155～156）。しかしエゲリアは、この教会はコンスタンティヌスによって建立されたと書き（Egeria 145）、ヘレナについてはいっさい触れていない。

やがて、聖十字架「人気」とヘレナ「人気」とがつながることになるわけだが、おそらくつぎのようなことだったろうと想像する。コンスタンティヌス大帝の治世以降、ローマ帝国のキリスト教化が進行するわけだが、そのなかでマリア信仰もしだいに高まってゆく（Drijvers 139）。その過程で、誰しものが気がつく聖母マリアとヘレナとの共通項、端的にいえば、「偉大な」息子をもった、「名もなき」女性という共通項。そして実際にあったヘレナの聖地巡礼と聖地における教会の建立という「史実」。こうして、たとえばエゲリアが描く、「観光地」化する聖地に群がる一般信徒の間でヘレナと聖十字架とが結びつき、聖十字架はヘレナが発見したのだという伝承が徐々に紡がれてゆき、最後に信仰のエリート集団がそれを掬い上げ、「物語」となって完成した。そのような筋道が考えられるのではなからうか。

その公式の物語には二つの系譜があった。まず、すでにみた395年のミラノ司教アンブロシウス。それと「教会史」の歴史家による記述（Drijvers chap. 3）。前者についてはその情報の出所のひとつとして、ドリイフェルスは聖地から帰って来た巡礼者を挙げている（Drijvers 123）。「お土産」として聖十字架のアイテムと一緒に、聖地で耳にしたそれにまつわる物語も持って帰ったのかもしれない。

後者については、ルフィヌスの『教会史』の該当箇所を長くなるが紹介することにする（Rufinus 16～17）。ルフィヌスは4世紀末までエルサレム

の修道院に在籍し、397年に故郷のイタリアに戻った。以下の当該箇所は、ルフィヌスの「オリジナル」ではなく、ギリシア語で書かれ、今は失われてしまった、ある『教会史』のラテン語訳と推定されている（Pohlsander 106; Drijvers 100）。

- ① 「コンスタンティヌスの母君であるヘレナは……天啓に導かれてエルサレムを訪れた。……ヘレナは、キリストの聖なる身体が十字架にかけられた場所はどこか、住民に尋ねる必要があった。見つけにくくなっていたのだ。というのも、往時の迫害者はそこにヴィーナスの像をたて、その場所でキリストに祈りを捧げようとするキリスト教徒は、そのヴィーナスを礼拝するかたちになってしまったからである。そのため、人が訪れなくなり、ほとんど忘れ去られていた。しかし、この敬虔な淑女は、天上のしるしが指し示す地点に直行し、そして、そこの不浄で汚れたものすべてを撤去し、がれきを取り除いてみると、地中深くに、無造作に置かれた三本の十字架を発見したのである。」
- ② 「発見した喜びも束の間だった。どの十字架なのか区別がつかなかったのである。ピラトがギリシア語、ラテン語、ヘブライ語で罪状を書かせた板も見つかった（「ヨハネによる福音書」19—19～20——引用者）。それでも主の十字架がどれかはわからなかった。」
- ③ そこで、エルサレムの教会の司教であるマカリウスの提案で、重病の貴婦人のもとに三本の十字架を持参し、神様にどれが本物かを教えてくれるように祈ってから、「マカリウスはそのうちの一本で彼女に触れたが、役に立たなかった。二本目も同じくにもおきなかった。ところが三本目で触ると、女性はすぐに目を開け、起き上がった。」そうして以前より元気になり、「家じゅうを走り

回って、神様の力を称えた。」

- ④ 「このようにはっきりしたかたちで祈りを聞き届けてもらった皇太后は、十字架を発見した場所に素晴らしい教会を建てたのである。」
- ⑤ 「主の身体を十字架に打ち留めていた釘を彼女は息子に送った。息子は、戦場で用いる馬勒や、同じく戦場で使用する兜をつくるさいに用いた。」
- ⑥ 「癒しの木そのものについては、一部は息子に贈られ、一部は銀の櫃におさめられてその場所に残された。そして現在も記念として変わらず大切に保管されている。」

まず、①がエウセビオスの、コンスタンティヌスによる聖墳墓発見の描写を下敷きにしていることは明らかである。そして④では、聖墳墓教会の建立もヘレナ、ということになる。そして⑥はその聖墳墓教会に聖十字架が置かれている、ということだが、それを「見物」したエゲリアはこう書いていた。「ある者が聖十字架の一部を齧り取るということがあり、それゆえ助祭が周囲に立ち、同じことをしないように監視している。」(Egeria 155)。そして⑤は、キリストとマリアとの関係とコンスタンティヌス大帝とヘレナとの関係とがしっかり重なり合っていたことを示している。アンブロシウスもヘレナを「第二のマリア」として語る (Drijvers 113)。

## 七 ブリテン、ないしイングランドの王妃、ヘレナ

日陰の身から劇的な復活、一族の悲劇と聖地巡礼、教会建立。ヘレナはもっとも人気のある聖遺物のひとつ聖十字架とともに、拡大しつつあるキリスト教世界の「世界的聖人 (universal saints)」のひとりに数えられるようになった。そのうえで、ここで注目したいのは、そのヘレナがブリテン

の「在地聖人 local saints」のひとりになってゆくことである。

「古代末期」、ピーター・ブラウンによれば、西ヨーロッパ周縁部において、「小キリスト教世界」が創出されてゆくのだが、そのひとつひとつは、自らを「拡散した単一の銀河系に存在」する「星団」であり、「偏在する天」を介して、「中心」と同等の「文化財」を構築しようとして信じていた (Brown 15; ブラウン 86~87)。その重要な一環が「自前の聖人づくり native saint-making」であった (Brown 15; Thacker 29)。そうしてヘレナは、この島国において「世界的聖人」から「在地聖人」へと変身する。

まず、731年に完成したとされるベダの『英国民教会史』にはこうある (Bede 20)

コンスタンティウスはブリテンで死去した。たいへん慈悲深く、また優しい人物であり、ディオクレティアヌス帝が存命中、ガリアとスペインを治めていた。息子コンスタンティヌスを遺した。彼は、妾の子どもであり、ガリアの皇帝になった。エウトロピウスによれば、コンスタンティヌスはブリテンにおいて皇帝となり、彼の父親の王国を継承した。

イングランドの「ナショナリズム」とまではいわないにしても、「ナショナルリティー」の「原典」とみること可能な『英国民教会史』にコンスタンティヌスが登場するのは (引用史料を除けば)、これだけなのである。おまけに、コンスタンティヌスは嫡子ではないとみる流れに棹さしていた。ちなみに、エウトロピウスは4世紀後半のローマの非キリスト教系の歴史家 (松原 303)。コンスタンティヌス大帝一族の醜聞を最初に暴いたひとりであった (Potter 245~246)。

さらに、その前の725年に書かれた『大年代記』においてもベダは、ヘレナが聖十字架を発見したという伝承がすでに広まっていた時代だった



にもかかわらず、コンスタンティヌス大帝が聖十字架を聖墳墓教会に祀ったと書き、さらに母親を手厚く葬ったことを記したうえで、ヘレナポリスへの改名のことも記載していた（Bede 320）。つまり、このアングロ・サクソン時代のイングランドの最高の歴史家は、コンスタンティヌス大帝とヘレナがこの島国の歴史の流れそのものにたいしては基本的に無縁だったことを「正確」に書いていたのである（Harbus 40）。

ヘレナはブリテン人だとする、その初出は、修道院長アルドヘルム（709年没）の『処女論 *De virginitate*』である。そこには、「コンスタンティヌスはコンスタンティウスの息子であり、妾のヘレナからブリテンで生まれた」とあった（Harbus 37~38）。ところが、その後、ヘレナとコンスタンティウスは正式に結婚したと書くものが登場するようになる。

この島国にも聖十字架が入って来るようになる。『アングロ・サクソン年代記』の885年の記録にはこうある。「教皇マリヌス（在位882~884年）が、ウェセックス王のアルフレッドにたいして、キリストが受難した十字架の一部というたいへんありがたい贈り物を賜った。」（*Anglo-Saxon Chronicles* 80）。そして8世紀以降、ヘレナは「聖人」として教会関連のさまざまな局面に現われるようになった（Harbus 33 ff.）。

おそらく、それと密接に関連して、ヘレナの地位の向上がみられるようになった。アルフレッド大王のよく知られる英語振興策の一環である翻訳事業のなかでベーダの『教会史』も英訳されるのだが、そこで「誤訳」か「翻案」かはともかく、コンスタンティヌスはブリテン生まれとなる。すなわち、「エウトロピウスによれば、コンスタンティヌスはブリテンにおいて生まれ、彼の父親の王国を継承した」となり、またヘレナは「妻」となる（Harbus 40 ff.）。

そして12世紀、よく知られるようにこの島国で本格的な歴史記述がはじまる。その主要な歴史書によって、ヘレナはブリテンに文字通り「帰化」する。

まず、ウィリアム・オブ・マームズベリーの『歴代イングランド王事績』(1125年)。

コンスタンティウスは、非常に教養のある君主として知られるが、後継者として、旅籠の若い女性 (stabularia)、ヘレナとの間にもうけた息子である、前途有望の青年、コンスタンティヌスをのこした。コンスタンティヌスは軍隊により皇帝として担ぎ上げられ、大陸侵攻を計画し、ブリテン人の大部隊を率いて出発した。(William of Malmesbury 16~19)

「旅籠の若い女性」が意味するところはすでにみた。すなわち、ヘレナ=下層、よって正式婚ではなかった、ということである。また、ここではまだ、ヘレナはこの島国の生まれ、とはなっていない。

つぎに、ヘンリー・オブ・ハンティングトンの『イングランド史』(1131年)。四帝分治制においてコンスタンティウスは、「ガリア、ブリテン、スペイン」を治めた。そうして、

コンスタンティウスは、コルチェスターのブリテン人の王であるコール (Cole) の娘、すなわち、われわれが聖人と呼ぶヘレナと結婚した。二人の間に、コンスタンティヌス大帝 (Constantinum magnum) が誕生した。…コンスタンティウスは、ブリテンのヨークにおいて死んだ。ブリテンの華であるコンスタンティヌスは30年と10カ月、統治した。ブリテン人の血を引いており、それ以前にもそれ以降にもブリテンには、彼に匹敵する人物はいない (Henry of Huntingdon 59, 61)。

そしてコンスタンティヌス大帝によるさまざまな建設事業が紹介された後で、

ブリテンの高貴の生まれのヘレナは、ロンドンを、現在も残っている壁によって取り囲み、コルチェスターにも市壁を提供したといわれている。彼女の多くの偉業のなかには、エルサレムを復興させ、偶像を一掃し、多くの聖堂によってそこを美しくしたことが挙げられる（Henry of Huntingdon 63）。

まず、「コール王」とは、先住ブリテン人＝ウェールズ系諸王国の系図に登場する、5世紀の伝説上の王である「コエル・ヘン（Coel Hen）」が起源ではないかと推測される。そしてコルチェスターの前身は、属州時代におけるローマ支配の最重要拠点のひとつカムロドゥーヌムだったが、やがて、この新しい地名が生成されてゆく過程において語源「づくり」が進行し、「コルチェスター（Colchester）」＝「コールの砦（fortress of Cole）」ということになり、そこでコエル・ヘンと結びついたのではないかと推測される（Harbus 64～65）。

それに、コンスタンティウスとヘレナの歴史が結びついて、「フォークロア」として流布するようになり、それをヘンリー・オブ・ハンティングトンが文字の世界に擲り上げた、と考えられる（Harbus 67 ff.）。

以上の二書は、歴史「学」史に然るべき地位を占める内容だったのにたいし、第三番目のジェフリー・オブ・モンマスの『ブリテン列王伝』（1136～1138年頃）は、「偽史」の歴史では燦然と輝くものとなる。「学者」風の前二者とは違って自由闊達な内容であり、よく読まれ、「中世のベスト・セラー」のひとつにも数えられ、しかもその「愛国」的な内容から、近世のある段階までは外交の舞台においてこの島国の「正史」扱いされることさえあった（Kightly 62）。

『列王伝』においては、属州時代のブリテンはローマ帝国の支配下に置かれたものの、トロイの英雄の血を引くブルータスを開祖とする王権支配は連綿と続いていた、とされる。たとえば第88代の国王、ルキウスはキ

リスト教を導入した、とされる（Geoffrey of Mommouth 86, 88）。このルキウスは156年に死んだことになっているのだが、そのことは「原始キリスト教会」がこの島国に存在したことを意味することになり、後代のプロテスタントにとってはたいへん好都合な歴史であり、偽史であることが明らかになってからも、ルキウス王の存在はなかなか否定されなかった（Heal）。

その『列王伝』によれば、コルチェスターの「公爵」であったコールは、ブリテンにおける反ローマの反乱のなかで前王を蹴落として第93代のブリテン王となった。それにたいしてローマ帝国の元老院は、

元老院議員のコンスタンティウスを派遣することにした。彼は賢明で勇敢な人物であり、スペインも征服しており、国家を強める努力においては誰にもひけをとることがなかった。ブリテン王のコールは、いかなる王も破ることができないと噂されるその人物がやって来ると聞き、怖気づいた。そこで、コンスタンティウスが上陸すると、使者を送って講和を申し入れ、王権を保持することと、ローマ政府に対しては、慣習的な税金を納めるだけということを条件に服従を申し出た。この申し出をうけたコンスタンティウスはそれに同意し、両者は人質を交換するかたちで和議を結んだのであった。その1ヶ月後、コール王は重い病気にかかり、8日後に死んだ。そこでコンスタンティウスが即位し、コールの娘、ヘレナと結婚したのであった。ヘレナはこの国のもっとも美しい少女であり、楽器を奏でることや教養の点で誰にも負けなかった。他に王位を継承する子孫がいなかったため、コール王は、自分が死んだとき、国をちゃんと治めることができるように配慮していたのである。その女性を伴侶とした後、コンスタンティウスは子供を授かり、コンスタンティヌスと名づけた。11年後、コンスタンティウスはヨークで死去し、王権はその息子に受け継がれた

（Geoffrey of Mommouth 96）

第95代ブリテン王，コンスタンティヌスの誕生である。

まことに鮮やかな歴史「学」から歴史「物語」への昇華である。ベスト・セラーになったのも頷ける。カイトリーによれば，コンスタンツ公会議（1414～1418年）とバーゼル公会議（1431年）においてイングランド代表団は，コンスタンティヌス大帝は「イングランド王室出身のヘレナから生まれ」たからという理由で，イングランドは席順で最優先されるべきだと主張したのだという（Kightly 62）。

ヘレナの在地化が完了し，島国の景観の一部に落ち着いたことを端的に示すのが，古事物学者，ウィリアム・カムデンの『ブリタニア』（1586年初版——以下ではその1695年版を使用する）である。歴史・考古学と地誌とを合体させた「古事物学」は，とくに近世ヨーロッパにあっては，「近代国民国家」のもっとも重要な構成要素のひとつである「国土」（もうひとつは勿論，「国民」）の生成に大きく貢献した。そしてカムデンの『ブリタニア』は，イングランド古事物学の最高峰に立つ（見市 1～3）。

『ブリタニア』の冒頭はブリテン諸島の歴史の概説になっている。そのなかにヘレナが登場する。

コンスタンティウスは，アウレリアーヌス帝の時代に軍人としてブリテンにいたときに，ヘレナと結婚した。ヘレナは，コールという小国の王の娘だった。そしてブリテンにおいてコンスタンティヌス大帝が生まれたのである。

そして，「コンスタンティウスはマクシミアヌスによって彼の妻と離婚することを余儀なくされた」とあり，さらにヘレナは「キリストが受難した」場所に教会を建て，さらに「聖十字架」を発見したと書いたうえで，

こう続ける。

ユダヤ教徒や異教徒はヘレナを咎めて、旅籠の若い女性（Stabularia）と呼ぶ。キリストが誕生した馬屋を探し出したのがこの信心深い王妃であり、そうしてその馬屋があったところに教会を建てたからである（Camden lxxv）。

巧みなヘレナ擁護である。ローマ時代のコインについての記述のなかで、もう一度、ヘレナは「ブリテン生まれ」と記載される（Camden xcix）。ついで本文では、まずロンドンについての記述のなかにこうある。

歴史家によると、コンスタンティヌス大帝が、母親のヘレナの頼みで、荒削りの石とブリテン煉瓦を用いてロンドンを囲む壁をつくったのである（Camden 312）。

その欄外の註には、「ヘレナのコインがしばしばその壁の下から見つかる」とある。そしてコルチェスター。

コルチェスターの住民は、コンスタンティヌス大帝の母であるヘレナがこの都市でコーンウォールの娘として生まれたことを誇りにしている。そしてヘレナが発見した十字架を記念して、市の紋章に、十字架が四つの王冠で囲まれている図案を採用した。……ヘレナはたいへん貴い生涯をおくり、つねにキリスト教の教えを広めていた（Camden 351）。

このようにコンスタンティヌス大帝をブリテン生まれとすることにたいして、ヨーロッパ大陸の高名な人文学者、ユストゥス・リプシウスからの批判もあったのだが、カムデンは（よくある、権威にたいしてもうひとつ

ヘレナ（見市）

の権威をもって対抗する手法で）「偉大な歴史家」、枢機卿バロニウスの名前を挙げ、いまや「愛国」的となったこの説を守ろうとした（Mulligan 275～276）。ちなみにバロニウスは、かの「コンスタンティヌス大帝の寄進状」を最初に偽書とした歴史家のひとりである。

カムデンの時代、国内でもコンスタンティヌス大帝＝ブリテン人説を疑う向きもあったのだが、「カムデンの権威」に支えられたこともあって、この説は18世紀まで持ちこたえた。最終的にそれを葬ったのは勿論、ギボン！（Mulligan 278）。

## 八 ウェールズの女帝

『ブリタニア』にはもう一ヶ所、ヘレナが登場する箇所がある。北ウェールズ・メリオネス州（Merioneth）のフェスティニオグ（Festincog）の近郊。

険しく、ほとんど通行できそうにない山中を通る、一本の石で舗装された幹線道路、ないし軍道があって、ブリテン語では Sarn Helen と呼ばれている。ヘレナ街道（Helen's Way）という意味である。コンスタンティヌス大帝の母であるヘレナによってつくられたと考えざるをえない。ヘレナの事業はローマ帝国全体に数多くあり、たいへん立派なものなのである（Camden 656）。

ウェールズの高名な歴史家であり、ウェールズ独立派としても名を馳せたグウィン・ウィリアムズは名著、『ウェールズはいつ生まれたか』（1985年）のなかで、（たぶん）あえてことを単純化してこういう（Williams 20）。

まことに実際的な意味において、ウェールズは、ブリテンの英雄、マ

グヌス・マクシムスからはじまったとってよい。ウェールズは西暦383年、マクセン・ウレディクとともに生まれたのだ。

マクセン・ウレディクについては、あとでみる。マグヌス・マクシムスとはスペイン出身の軍人。383年、ブリテンにおいて皇帝として旗揚げし、ローマ・ブリテンの精鋭部隊を率いて大陸に侵攻、一時は東方帝のテオドシウスから西方の正帝として承認されたのだが、結局、388年、テオドシウスに敗れて処刑される。しかし、短期間にせよローマ帝国の西半分を支配したことは間違いなく、コンスタンティヌス大帝とならぶブリテンの「英雄」として語り継がれることになった (Matthews 431~432)。そしてアングロ・サクソン系諸族の侵攻以降、「ウェールズ」になりつつあるブリテン島の西部にあって群雄割拠する先住民系の諸王国はこぞって、このマグヌス・マクシムス帝を自分の家系の祖先に据えようとし、さらに、その延長線上で、コンスタンティヌス大帝に、さらにヘレナにつなげようとしたのであった (Matthews 444 ff.)。

そのことが確認できる最古の文字史料は、南ウェールズにあったデハイバルス (Deheubarth) 王国のオウイン (Owain) 王 (在位：950~988年) の家系図である。それによれば、王の祖先は、「アーサー (勿論、あのアーサー王)、そして支配者・マクシム (Maxim Guletic —— マグヌス・マクシムス帝のこと)……そしてコンスタンティヌス大帝、そしてコンスタンティウスとヘレナ・ルイダウク (Helen Luitdauc —— 万軍の主)」となっていた。その「万軍の主」たるヘレナについては、こう記されている。

キリストの十字架をもとめてブリテンからはるか遠くのエルサレムにまで旅をし、そこから十字架をはるか遠くのコンスタンティノープルにまで運んでいった。その十字架は現在もそこにある (Harbus 53)。



マグヌス・マクスィムス帝は、ガリアのトリニアに宮廷をもうけた。そこはヘレナゆかりの地でもあった。9世紀には、ヘレナ崇拜熱の盛り上がりのなかで、ヘレナはトリニアで生まれたとする説も登場した。このことも、ヘレナがウェールズの世界に入ってくる回路のひとつになったのかもしれない（Linder 87～88；Harbus 44；Matthews 446）。

そしてウェールズの英雄に仕立てられたマグヌス・マクスィムス帝は、『マビノギオン』に登場する。『マビノギオン』とは、「古代から中世半ばまで口承により受け継がれてきたウェールズの前伝説や民間伝承を題材に、中世ウェールズ語（12～14世紀）で編まれた物語集」のことである（松村・富田 439；中野）。そのうちの「マクセン・ウレディクの前」は、ルヴァインの皇帝、マクセンが夢で見た乙女を探して「ブリダインの島」に上陸し、そうしてその乙女であるエレンを見つけて結ばれるという物語だが、このマクセンが歴史上のマグヌス・マクスィムス帝を、そしてエレンがヘレナをそれぞれ踏まえていることはすでに多くの論者によって指摘されている（Matthews 432 ff.；Harbus 55 ff.；中野 424）。「ウレディク」とは「統治者、または王子という意味」（中野 424）。実際のマグヌス・マクスィムス帝には妻子がいたが、その名前はわからない。そして「マクセン・ウレディクの前」のなかにつきのような文章がある。

のちにエレンは、ブリダイン（ブリテン）島を縦断して一つの城からほかの城までを結ぶ公道をつくろうと思い立った。そこで、これらの道は＜エレン・ルイダウクの道＞と呼ばれている。というのも、彼女はブリダイン島の出身で、彼女のほかにはだれも、このようにりっぱな道をつくる軍隊を動員できる者はいなかったからである（中野 146）。

カムデンのいう「ヘレナ街道」である。旧ブリテン東部を支配するア

ングロ・サクソンのイングランドに対峙しつつ形成されてゆくウェールズの「ナショナル・アイデンティティの生成」において、かつてのローマ帝国・属州時代は、グウィン・ウィリアムズにもその傾向が垣間見られるのだが、「黄金時代」となる。マシューズは、そのようなアイデンティティのありようをルーマニアの事例になぞらえている (Matthews 432)。国歌のなかにトラヤヌス帝の名前を挙げ、その「ローマ人」の血が流れていることを民族の誇りとする、そのようなナショナル・アイデンティティのことである。ウェールズの景観にしっかりと刻み込まれたローマ街道は、その黄金時代の文字通り目にみえる証拠だったのである (Williams 13~14; Matthews 437, 448)。

最後に、その黄金時代を雄弁に物語るローマ街道に、マグヌス・マクシムス帝ではなく、ヘレナ (エレン) の名前がつけられたのはなぜなのだろうか。おそらく実際のヘレナの聖地エルサレムにおける教会建立のことが、その根底にあるのではなからうか。さらに分析を進めれば、おそらく「地母神」的な系譜もみえてくるのではないかとおもう。

## 九 ヘレナの泉

「在地化」の終着点は、「聖なる泉」である。聖なる存在にまつわる泉は、一般民衆にとってもっとも身近な聖域であり、とくにその疾病の「癒し」効果に善男善女がすがったことはよく知られているとおりである。

ジェレミー・ハートの『イングランドの聖なる泉』は、この領域の総集成である (Harte)。そのなかでハートは、聖人に「奉納」された泉について、どの聖人に奉納されているのかを数えた (聖母マリアは除く)。その結果は、以下のとおりである。(Harte 1-62 ff.)

一、ヘレナ

50 コンスタンティヌス大帝の母親

二、	洗礼者ヨハネ	23	イエスに洗礼
三、	トマス・ベケット	19	カンタベリー大主教, 1170年, 暗殺さる
四、	アンナ	16	聖母マリアの母親
五、	ペテロ	15	イエスの一二使徒の筆頭格
六、	アンデレ	13	イエスの一二使徒のひとり
七、	アレクサンドリアのカ タリナ	12	マクセンティウス帝により殉教か
八、	アンティオキアのマル ガリタ	9	おそらく架空の人物
九	マグダラのマリア	8	新約聖書に登場
十、	カスバート	8	リンディスファーン修道院長
十一、	ミカエル	7	大天使
十二、	三位一体	7	
十三、	ゲルゲギオス	6	竜退治
十四	オズワルド	6	ノーサンブリア王, 642年「聖戦」 で「殉教」

※5つ以下は省略。

ヘレナがなぜこれほど「人気」があったのかについての詳細な「地方史」的な分析はハート、さらにジョーンズの分析にゆだねることにして (Jones), 一点だけ指摘しておけば、ヘレナは、この島国の「生まれ」ということになった結果、この島国が誇ることのできる、ほとんど唯一の「世界的聖人」になったのである。

その数あるヘレナの泉のひとつについて、17世紀の「古事物学者」のひとりロバート・プロットは、その『スタッフォードシャー州の自然史』(1686年)のなかでつぎのように報告している (Plot 49)。ラシュトン・

スペンサー（Rushton Spencer）の「聖ヘレナの泉」は、もうひとつの泉とともに、「上掛け水車（overshot Mill）」を「ここ何年」も勢いよく回すほどの水量をほこっている。ところが、

この泉は涸れることがある。……それもある日、突然、涸れるのである。地元民は、それは、凶作や戦争などの大きな革命という途方もない惨事の前にしか起きない、とおもいこんでいる。彼らによると、先の内戦の前に泉が涸れた。そして国王チャールズの殉教の前に、さらに10年後、穀物の凶作の前に、最後に1679年、先だつての騒動の前にも泉が涸れたと彼らはいい張る。

「先だつての騒動（our late disturbances）」とは、一連の「カトリック陰謀（Popish Plot）」（正確には、カトリック陰謀・でっち上げ）事件のこと。

さらに、『イングランドの聖なる泉』の資料編には、ヨークシャー州ウォルトン（Walton）のヘレナの泉にかんする19世紀末から20世紀初頭にかけての記録が収録されているが、そのうちのひとつ1869年に出版された紀行文を再引用しておこう（Harte 3—377）

その水は医療効果が少しあるとされ、眼の病に効くと評判である。また村の娘たちは、そこにピンなどを投げ入れて、その聖女をなだめると願いが叶うと信じている。……その泉に張り出している木の枝には、献納された布の切れ端がいくつも結ばれているのが見られた。

木の枝に「お供え」を結ぶ風習については、1934年に撮られた、このウォルトンのヘレナの泉のものの写真がある（Bord 94）。また16世紀半ばの、イギリス古事物学の元祖であるジョン・リーランドの『巡行』によれば、このヘレナの泉の近くには「聖ヘレナ礼拝堂」があり、また「聖へ

レナの渡し場（St Helen's Ford）という地名もあった（Leland 531）。この点については、カムデンと 1695 年版『ブリタニア』の補遺者も触れている（Camden 714, 732）。

小アジアの旅籠ないし宿駅からはじまったひとりの女性の数奇な生涯の「最後」は、こうして、「泉の女神」として島国の日常的な景観のなかにすっかり溶けこむものになっていた。妙に納得のゆく落ち着き先ではなかろうか。

#### 引用文献

- The Anglo-Saxon Chronicles*, ed. M. Swanton, 2000.  
Barnes, T. *Constantine and Eusebus*, 1981.  
——— *Constantine: Dynasty, Religion and Power in the Later Roman Empire* 2014.  
Bede, *The Ecclesiastical History of the English People, The Greater Chronicle, Bede's Letter to Egbert*, ed. J. McClure and R. Collins, 1999.  
Bord, J. and C. *Sacred Waters: Holy Wells and Water Lore in Britain and Ireland*, 1985.  
Brown, P. *The Rise of Western Christendom : Triumph and Diversity A.D.200–1000*, 1997.  
Camden, W. *Britannia*, ed. E. Gibson, 1695.  
Drake, H. A. *Constantine and the Bishops: The Politics of Intolerance*, 2002.  
Drijvers, J. W. *Helena Augusta: The Mother of Constantine the Great and the Legend of Her Finding of the True Cross*, 1992.  
Egeria, *Egeria's Travel*, ed. J. Wilkinson, 2002.  
Flower, R. “Visions of Constantine”, *Journal of Roman Studies*, 102, 2012.  
Fox, R. L. *Pagans and Christians*, 2006ed.  
Geoffrey of Monmouth, *The History of the Kings of Britain*, ed. M. D. Reeve, 2007.  
Gotoh, A. “The ‘Conversion’ of Constantine the Great”, *Studia Patristica*, 95, 2017.  
Guthrie, P. “The Execution of Crispus”, *Phoenix*, 20, 1966.  
Harbus, A. *Helena of Britain in Medieval Legend*, 2002.  
Harte, J. *English Holy Wells: A Sourcebook*, 3 vols., 2008.  
Heal, F. “What can King Lucius do for you?; The Reformation and the Early British Church”, *English Historical Review*, vol. 120, 2005.  
Henry of Huntingdon *Historia Anglorum*, ed. D. Greenway, 1996.  
Holum, K. G. “Hadrian and St.Helena: Imperial Travel and the Origins of Christian Holy Land Pilgrimage” in *The Blessings of Pilgrimage*, ed. R. Ousterhout, 1990.

- Jones, G. “Holy Wells and the Cult of St Helen”, *Landscape History*, 8, 1986.
- Kightly, C. *Folk Heroes of Britain*, 1982.
- Lactantius, *On the Deaths of the Persecutors*, translated at Intratext CT.
- Leadbetter, B. “The Illegitimacy of Constantine and the Birth of the Tetrarchy” in *Constantine: History, Historiography and Legend*, ed. S. N. Lieu and D. Montserrat, 1998.
- Leland, J. *John Leland’s Itinerary: Travels in Tudor England*, ed. J. Chandler, 1998.
- Lenski, N. “Empresses in the Holy Land: The Creation of a Christian Utopia in Late Antique Palestine” in *Travel, Communication and Geography in Late Antiquity*, ed. L. Ellis and F. L. Kinder, 2004.
- Linder, A. “The Myth of Constantine the Great in the West: Sources and Hagiographic Commemoration”, *Studi Medievali*, 16, 1975.
- MacCulloch, D. *Christianity: The First Three Thousand Years*, 2009.
- Matthews, J. F. “Macsen, Maximus, and Constantine”, *Welsh History Review*, 11, 1983.
- Mulligan, W. J. “The British Constantine: An English Historical Myth”, *The Journal of Medieval and Renaissance Studies*, 8, 1978.
- Pohlsander, H. A. “Crispus: Brilliant Career and Tragic End”, *Historia*, 33, 1984.  
 ——— *Helena: Empress and Saint*, 1995.
- Plot, R. *The Natural History of Staffordshire*, 1686.
- Potter, D. *Constantine: The Emperor*, 2013.
- Rufinus, *The Church History of Rufinus of Aquileia*, ed. P.R. Amidon, 1997.
- Stark, R. *The Rise of Christianity: A Sociologist Reconsiders History*, 1996.
- Stephenson, P. *Constantine: Roman Emperor, Christian Victor*, 2010.
- Thacker, A. “Local Sanctorum: The Significance of Place in the Study of the Saints” in *Local Saint and Local Churches in the Early Medieval West*, ed. A. Thacker and R. Sharpe, 2002.
- R. Van Dam. *The Roman Revolution of Constantine*, 2009.  
 ——— *Remembering Constantine at the Milvian Bridge*, 2011.
- Veyne, P. *When Our World Became Christian 312~314*, 2010.
- Weiss, P. “The Vision of Constantine”, *Journal of Roman Archaeology*, 16, 2003.
- Williams, G.A. *When Was Wales?: A History of the Welsh*, 1985.
- William of Malmesbury *Gesta regum Anglorum*, ed. by R. A. B. Mynors, 1998.
- Woods, D. “On the Death of the Empress Fausta”, *Greece and Rome*, 45, 1998.
- Zosimus *New History*, Livius.org.
- エウセビオス 『コンスタンティヌスの生涯』, 秦剛平訳, 京都大学学術出版会, 2004年。  
 ——— 『教会史』, 秦剛平訳, 講談社, 2010年。

ヘレナ（見市）

- 中野節子訳『マビノギオン—中世ウェールズ幻想物語集』, Jula 出版局, 2000 年。  
ブラウン『古代から中世へ』, 後藤篤子編訳, 山川出版社, 2006 年。  
松原國師『西洋古典学辞典』, 京都大学学術出版会, 2010 年。  
松村尙・富田虎雄編『英米史辞典』, 研究社, 2000 年。  
見市雅俊「ウィリアム・カムデン著『ブリタニア』を読む」, 『紀要』(中央大学  
史学科) 48, 2003 年。

